特集 島から考える日本・Ⅳ

庭仕事×カキ養殖
佐渡島▶P.34

移住者支援×シェアスペース運営ほか
佐渡島▶P.34

前号に引き続き、島での《複業》についての特集をお送りする。

今回紹介する方々も含めて、皆さんが複数の仕事を組み合わせながら生計を立てるにいたった経緯はさまざまであるが、大きく次のパターンに分けることができる。

「自分のスキル（資格など）を活かして意識的に複業化していった方」「季節による収入の変動の平準化を目的に波動の違う仕事を組み合わせた方」「趣味や特技を収入化した方」「地域で暮らすうちに地元ならではのニーズをみつけてスモールビジネス化した方」などである。

一概には言えないが、彼らの多くは初めから複業を目指したのではなく、正社員（職員）や地域おこし協力隊などとして島で働くうちに、結果として複業のスタイルになっていったケースが少なくない。ただし、働き方は多様で、例えば第一次産業と製造業や飲食業、移住者支援とゲストハウスやシェアスペースの運営など、それぞれの島の自然環境や特性、これまでの自身のキャリアなどに合わせた独自色の

飲食店員×外国人向け観光ガイドほか
弓削島▶P.42

スポーツバー経営×体育教室主宰ほか
佐渡島▶P.34

強いものとなっている。

一つの生業にこだわることなく、自分の夢や地域の需要に応じて柔軟に仕事を掛け合わせる皆さんの姿（考え方）は、これからの各島における移住の促進、交流・関係人口の拡大に向けて参考になる点も多いのではないだろうか。

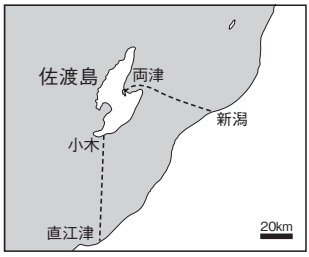
今号では、UIターンサポートと雑貨屋・シェアスペース運営、スポーツバー経営と体操教室の主宰、庭仕事とカキ養殖、フリーペーパー編集と宿泊業、飲食店員と外国人向け観光ガイドなどにより、自分自身にあった島暮らしを実践する国内外からの移住者の皆さんに、複業にいたるまでの経緯、現在の生活、将来の展望などについて語っていただいた。

フリーペーパー編集×宿泊業ほか
福江島▶P.48

自然豊かな島で広がる複業

―若手UIターン三人の働き方を紹介

合同会社palette（パレット）　熊野　礼美



佐渡島：新潟市の北西45kmに位置し、面積約855.61km²、周囲約280.9km、人口52,814人（令和2年2月末現在）の日本最大級の島。北の大佐渡山地と南の小佐渡山地に挟まれた中央部に広大な国中平野が広がる。対馬暖流の影響で、冬は暖かく、夏は涼しい。トキや金銀山、能など文化財の宝庫。

■佐渡へのUIターンをサポート

面積は東京二三区の約一・四倍、日本最大級の島・佐渡島。北に一〇〇〇メートル超の金北山（きんぼくさん）をはじめとする大佐渡山地、南に小佐渡山地があり、中央に国中平野（くになか）が広がる。豊かな土壌と気候を活かした農業や漁業が営まれ、第一次産業従事者は二割にのぼる。また、人口約五万三千人を擁するこの島にはコンビニはもちろん、全国チェーンの飲食店や家電量販店もあり、人々の働き方もさまざまだ。

筆者は二〇一四年に登山のため初めてこの地を訪れた。島の魅力に惹かれて同年一一月に移住、地域おこし協力隊として移住支援の活動をはじめた。移住したての当人が、移住相談に乗るという体制だったが、当時は空き家情報の収集や掲載がおもで、佐渡の隅から隅までを訪れ、島のさまざまな側面に触れられる貴重な経験ができた。

協力隊の任期終了後も「佐渡UIターンサポートセンター（以下、SUI（スイ））」の移住コーディネーターとして、仕事を続けている。SUIは、二〇一八年四月から移住コーディネーターと事務スタッフ各一名の体制となって、現在にいたっており、「四〇年後の茶飲み友だちをここで」というスローガンを掲げて活動している。この標語は、若者が少なく高齢化が進む集落に住んでいる筆者が、「自分が歳をとったら近所に遊びに行ける同世代はいるだろうか」と思ったことをきっかけに作成したものだ。佐渡で充実した暮らしを送るためには、人と人とのつながりが不可欠で、移住者を孤独にさせないことがサポートの第一歩だと考えている。

SUIの仕事は、相談業務・情報発信・イベント企画の三つに分けられる。とくに相談業務は、移住後のアフター

フォローに力を入れており、月三回開催している交流会には島の住民・移住者・移住検討者が誰でも参加できる。「ここで友だちができた」「同じ趣味の人を見つけた」「いろんな人と話せる機会がほしかった」などの感謝の声をいただくほか、ここでの出会いをきっかけに結婚した人もいる。

移住にあたっての家探しや職探し以外にも、さまざまな相談事が持ちかけられる。「冬の車の運転の不安」「地域の方たちとの関係構築」「島での子育て」「嫁いだ先の義父母との関係」など内容は多岐にわたり、それぞれに寄り添ったサポートを行なうためには、多分に想像力が求められる。筆者は「自分だけが悩んでいるわけではないんだよ」と、相談者を孤独から救い、住み続けられる環境をつくることが何より大切だと思っている。そこで、SUIのスタッフだけではなく各分野に詳しい島人を「佐渡暮らしサポーター」として登録し、相談できる体制を昨年末にスタートさせた。現在、知人などを中心に一五人ほどの登録がある。

古民家を改装した佐渡UIターンサポートセンター。

島へのUターンも少なくない。今回、佐渡における複業の事例を取り上げたいという「しま」編集部からの依頼に応え、ここ一〇年で島に帰郷し、複数の仕事を掛け持ちしながら活動している原田光さんと本間金五（きんご）さんを紹介したい。加えて、筆者自身の複業事情についても記す。

●

体操教室とスポーツバーを運営する体育講師

原田　光さん

サッカーと生徒教育――好きなことを仕事に

地方に住む高校生の多くが抱く、都会への憧れ。現在、佐渡で「ルーチェ・キッズクラブ体操教室」を主宰する原田光さん（三六歳）も、当時は同じ思いを持つ一人だった。相川地区出身の原田さんは、島内の高校でサッカー部に所属。三年間、部活動に明け暮れた。日韓ワールドカップ（二〇〇二年）が開催され、テレビで、大勢の人が街に溢れ、見ず知らずの人たちと肩を組みながらサムライジャパンを応援する様子を知ったのは、ちょうどそんな時だった。

「サッカーってすごい、スポーツの力ってすごいって思いましたね」

心を強く揺さぶられた原田青年は、仲間とともに行動に移す。「日本vsチュニジア戦4時キックオフ」というポスターを学校中に貼り、視聴覚室でパブリックビューイング

を開催。一五〇人を集めた。

高校卒業後は、神奈川県鎌倉市にあるお兄さんのカレー屋さんで半年ほど働き、渋谷のスポーツバーへ移った。当時は「特にやりたいことがあるわけではなく、ただ東京へ出てスポーツバーで働いてみたいという気持ちだけだった」という。

原田 光さん。

原田さんは、バーのお客さんと接するうちに、保育士の仕事にも興味を持つようになる。「保育士のお客さんがいて、話を聞いていいなと思うようになりました。もともと子ども好きだし、子どもたちと一緒に体を動かす仕事ができたらと。そろそろ自分の進路をしっかり決めていかなければならない、と考えていた時期でもありました」

その後、保育士資格を取るために専門学校へ入り、二〇〇六年に一回目のUターンを果たす。原田さんは、「Uターンに抵抗はありませんでした。保育士の実習で島に戻った時も『佐渡っていいな』と思ったし、地元に残っていたり、Uターンで島に帰ってきた同級生が多かったことも心強かった」と、当時を振り返る。

保育士として里帰りした原田さんは、地元の社会人フットサルチームに加入。この時に出会ったコーチが、過去に埼玉の実業団で教えていたことのある日本サッカー協会の指導者ライセンス保持者だった。彼の指導を通して、教えてもらうことの楽しさや上達を実感できる喜びを経験したことが、原田さんの「教えること」に対する興味に結びつく。二〇〇八年、原田さんは、スポーツインストラクターになるため再び東京へ向かった。

サッカーのインストラクターとなり、子どもたちと接しながら体を動かす。多くの生徒を指導し、彼らが上達する姿を見ることにやりがいを感じる。思い描いていた自分らしい働き方が、少しずつ形となり始めた東京四年目、原田さんをケガが襲う。

「（ケガで）定年までインストラクターとして働くイメージが持てなくなりました。だけど、スポーツからも離れたくない。ふと高校生の時のパブリックビューイングを思い出しました。やはり自分はスポーツバーがやりたい」

体操教室「ルーチェ・キッズクラブ」を主宰

その後、原田さんはスポーツバー開業を目指し、ノウハウや知識を養い、経験を積むために飲食店で働く。この時、独立するなら「スポーツ」と「子ども」をテーマとしたいと考えていたという。

二〇一四年、満を持して二回目のUターン。保育士時代にお世話になった方々に連絡を取り、自分自身のことや島でやろうと思っていることを知ってもらうため、無料の親子体操教室を開催した。原田さんは「私は佐渡出身ですが、世代が変われば知っている人も少なくなる。保護者の皆さ

んに私自身を売り込む気持ちもありました」と話す。

ホテルのアルバイトをしながらの体操教室は四カ月ほど続いた。毎回好評で、「ルーチェ・キッズクラブ」として月謝制にすることが決まっても、すぐに五〇人の枠が埋まったという。現在、同クラブには、五会場で計一三〇人ほどの子どもたち（三～一二歳）が所属している。年代による区切りはなく、一人ひとりの課題があり、それに挑戦していくスタイルで、「スポーツ選手をつくるための教室ではなく、あくまで体を動かすことを楽しんだり、チャレンジしたらできるという自信を持つ子を育てたい」という原田さんの思いが実践されている。当初から七年間子どもを通わせている保護者は「先生が子ども一人ひとりの癖を分かったうえで、指導してくれています」と感想を口にする。

ルーチェ・キッズクラブ体操教室で子どもたちを指導する原田さん。

このほか原田さんは、佐渡高校相川分校、佐渡保育専門学校、佐渡看護専門学校での体育講師も務めており、生徒がキッズクラブにボランティアとして参加することもある。このボランティア経験から、保育士を目指すようになった教え子もいたという。原田さんは「自分の存在が彼らの将来を考えるきっかけになっていることが嬉しい」と話す。

若い世代が集うスポーツバーを開業

「バーを開くならいい物件がある」と勧められ、念願のスポーツバー「SUSHIKA（すしか）」をオープンしたのは二〇一七年のこと。店名は、原田さんの祖父母が切り盛りしていた旅館「寿司嘉」に由来する。「寿司嘉はいつもたくさんのお客さんで賑わっていた」と、地元の人々の心に残っているように、多くの人が集まるバーにしたいとの願いが込められている。

店の客層は二十歳代が中心。高齢化の進む島で、若者が集う貴重な場所となっている。とくに週末はダーツやカラオケを楽しむ人で賑わう。若い世代がSNSなどで店の楽しい雰囲気を発信し、それを見た若者たちがさらに集まってくる流れだ。キッズクラブの親子にも利用していただけるようパーティーなども行なっており、大きなスクリーンで子どもたちとスポーツ観戦をしたり、保護者同士の交流の場にもなっている。原田さんは、「進学などで佐渡を離れても、島に帰った時に集える場所にしたい。まだ先のことですが、成人式を終えた教え子たちが、ここに集合してどんちゃん騒ぎをしてもらえると嬉しいです」とバーの展望を語る。

少子化が進む中、ルーチェ・キッズクラブは、会員を安定して保持している。佐渡唯一の体操教室であり、島内の多くの地区でスポーツ施設があまり充実していない現況も

スポーツバー「SUSHIKA」。

ニーズにつながっているのだろう。原田さん自身が各地区の体育館や小学校を回り、送り迎えなどの保護者負担を減らしている点もその一因かもしれない。

原田さんは「子どもに継続は力なりなんて教えられないですよ、自分は転職が多いから」と笑う。しかし、好きなことを貫いて、仕事にしている彼の姿を子どもたちは必ず見ている。また、スポーツバーや体操教室の運営、体育講師とさまざまな仕事を組み合わせながら生計を立てる原田さんの働き方は、島の子どもたちの生き方にひとつの手本を示しているようにも思う。

庭仕事×牡蠣養殖で収入の安定を実現

株式会社佐渡活代表　本間金五さん

「島に住みたい」が起業の原動力

「起業しようと思っていた訳じゃないんです。やってみたらできそうの繰り返しでした。『佐渡に住み続けたい』という気持ちが原動力です」

庭仕事と牡蠣養殖、一見関係の薄そうな二つの仕事を柱に事業を展開する「株式会社佐渡活（さどかつ）」の本間金五代表（三九歳）は話す。

新穂（にいぼ）地区出身の本間さんは、島内の高校を卒業後、大学進学を機に神奈川県へ。卒業後は同県の高校の体育教師になった。その後、縁あって東京のＩＴ企業に転職。二〇〇九年に結婚し、一児の父となる。

「子どもが生まれると学校の環境が気になって。都会の校庭は土じゃなく、休日に学校のグラウンドで遊べないことも衝撃でした。圧倒的に自然と戯れる時間が少ないんです」

自分の幼少期と同じ体験を、わが子にさせることができないと気づいたことが、島に帰る大きな動機となった。妻の彩子さんも、自然に近いところでの子育てをしたいと、賛同してくれた。偶然にも、当時勤めていた会社が、佐渡の企業誘致に携わっており、「ならば自分も」と二〇一一年四月にＵターンを決意した。

本間金五さん。

佐渡に戻った本間さんは、「ＮＥＸＴ佐渡（島内の経営者を中心に、専門家・県・市・銀行などで構成する民間の創業・企業誘致支援組織）」のメンター（助言者）で、本間さんのことをよく知る人物から「庭仕事で起

業してはどうか」とのアドバイスを受ける。庭仕事はもちろん会社経営も何もかも手探り状態だったが、とにかく行動を起こそうと、二〇一六年に庭仕事を事業の柱とする株式会社佐渡活を設立した。

牡蠣養殖で冬季の収入を確保

庭仕事を始めた本間さんは、とくにお盆に合わせて庭の草刈り・剪定・垣根の手入れなどしたいという家庭が多いことに気づく。地道な営業努力が身を結び、繁忙期には休みが週に一日あるかないかくらい忙しくなった。しかし同時に、冬季の収入確保に悩むことになる。初年度の冬は、NEXT佐渡に参加している企業を手伝い、二・三年目はスキー場や建設関係、牡蠣小屋のアルバイトをしてなんとか収入を得た。本間さんは、「仕事があれば声がかかるが、安定的には仕事がないことが課題だった」と振り返る。

一方、夏はますます忙しくなり、従業員を雇用したいと考えるようになる。そこで、年間を通して収入が安定するように、二〇一九年に会社として牡蠣の養殖に取り組み始めた。

じつは、庭仕事と牡蠣養殖は相性がいい。牡蠣の繁忙期は庭作業が極端に減る

庭師として働く本間さん。

一二月と一月。宴会シーズンには、牡蠣の消費が増えるのでその出荷作業に追われる。二月に種付けを行ない、次の収穫に向けて筏（いかだ）に吊るす。牡蠣の作業が落ち着きだすと春がやってきて、庭仕事が舞い込み始める。一年のサイクルが、庭仕事と牡蠣養殖で上手く回っていく算段だ。本間さんは、現在、牡蠣養殖の研修中だが、将来的には加茂湖漁業協同組合の正組合員を目指している。

「佐渡に住み続けるには安定した仕事が必要。牡蠣養殖はその手段の一つでした。一から教えてもらって現在があります。楽しいことも辛いことも実際にやってみないとわからない。牡蠣養殖は湖で行なうため、波はほとんどなく、遠い沖まで出ることもありません。取り組んで初めて知ることも多いです」と話す本間さん。海の仕事というと、船酔いが辛そう、力仕事で大変などとネガティブな印象を持つ人が少なからずいるが、少しでも若い世代に牡蠣養殖を知ってもらおうと、高校などへ説明に回ることもあるという。

島東部の加茂湖で牡蠣養殖に取り組む。

「佐渡活を就職先の一つとして考えてもらいたい。できるかどうかわからなければ、まず体験してもらいたい。やってみたらできた、そういう経験の積み重ねでいいと思うんです」

地域間・世代間のつなぎ役

本間さんの若い世代を育てたい、という気持ちは庭仕事や牡蠣養殖だけに留まらない。本間さんは、商工会青年部、鬼太鼓（おんでこ）新穂中央青年会、消防団、佐渡青年会議所、自治会役員などさまざまな顔を持つ。来年度にはＰＴＡ副会長も務める予定だ。本間さんは、「集落は人数が少ないから、同じ人がいろいろな団体に所属しています。さまざまな場所で顔を合わせる機会が多いと、自然と絆も深まりますね。また四十歳代が中心の会もあれば、この年代が卒業を迎える会もあり、上の世代と下の世代のつなぎ役として、いろいろな人脈ができ、たくさん情報が入ってきます。自分たちの世代が先輩につないでもらってきたように、私も次の世代へのつなぎ役になりたい」と話す。

牡蠣の袋詰めを持つ本間さん。加茂湖漁業協同組合の正組合員を目指している。

新型コロナのため、昨年のお盆は帰省を控える方が多かった。本間さんのもとには、そういった佐渡出身者から、お墓や実家の草刈りなどの依頼がたくさん届いたという。なかには本人に代わって線香やお花をお供えして欲しいというお願いもあったようだ。佐渡活では、そういった需要にも応えられるよう、提供サービスの充実を図っている。

●

■「人が集う場づくり」で移住者の活動を後押し

筆者は、Ｕターン（希望者含む）からの相談を多数いただくが、「島には昔から仕事がない」というイメージを持つ方が非常に多い。しかし、実際には、五万三千人もの人が住む島に仕事がないわけがなく、ないのは「自分がやりたい仕事」である。「やりたい仕事」がなければ、原田さんのように自らつくったり、本間さんのようにまずは（やりたいことを）やってみようといった「考え方の転換」が、これからの佐渡には必要となっていくのではないだろうか。働くことに対する視点を変え、実践に移してみることで、自分の思わぬ適性に気づいたり、隠れていた島のニーズを発見することもあると思う。原田さん、本間さんのように、すでにその実践者が生まれていることは、とても心強いと考えている。

先述の二人のように、筆者自身も複数の仕事を持っている。地域おこし協力隊の任期終了とともに立ち上げた「合同会社ｐａｌｅｔｔｅ」で、ＳＵＩでの活動（佐渡市からの委託）のほか、雑貨セレクトショップ「しまカタリ。」、シェアスペース「ひょうご屋」を運営している。これらはどれも「人

が集う場づくり」を念頭に置き展開しているものである。「しまカタリ。」は、UIターンの報告をする場としても機能し始めた。市役所の窓口ではなく、雑貨屋のようなカジュアルな場で、構えることなく〝ちょっと〟お話しをしてくださる感覚で、例えばこれまでに「移住相談をするまでもないが、雑貨を見るついでにサポートセンターの様子を知りたい」という方が、雑談の中でUターンの話をしたり、逆に「今までお世話になったけど、佐渡を離れることになりました」といった報告もあった。筆者は、移住サポートには、こういった誰でも立ち寄れる場所をつくることが必要だと感じている。

島の南西部・小木地区にある「ひょうご屋」は、保健所の営業許可をとった場所で、「飲食店を始めたい」「土日だけカフェをしたい」といった起業や小商い（ポップアップショップ）をしたい方々のスタートを支援するつもりで運営している。現在、スープカレーとパフェを提供するカフェが入居しているが、利用者（オーナー）は、月の半分をご家族の介護、残り半分を店の営業にあてるなど、自分自身のライフバランスにあったスタイルを築かれている。

近年、最初は正社員として就職して、暮らすうちに得意なことを活かしてもう一つ仕事をつくったり、思いがけずみつけた地元ならではのニーズを収入に変えるといった「複業スタイル」をとるUIターンが増えているように感じている。起業しようと考えて移住してくるのではなく、メインの仕事をしつつ、好きなこと・得意なことが自然とスモールビジネスにつながっていくという流れである。IT企業勤務の養蜂家、酒蔵に勤めるかたわら手づくりチョリソーを販売している方、シンガーソングライターとして活躍している野草茶製造会社の社員、ライターをしながら農園に通われている方――。働き方が多様化することで、自然と人のつながりの幅が広がり、人間関係も深まって、新たな情報網ができ、また別の事業に発展していく。複業は、島で生きていく上でのさまざまな可能性を有している。この可能性を見つけられる人がこれから増えていくことで、佐渡は彩り豊かで多様な考え方や働き方が混ざり合う、活気のある島となるだろう。

ワーケーションやサテライトオフィスなど、新たな風も吹き始めている。これから移住を検討されている方は、刺激あふれる佐渡島で自分の可能性に挑戦してほしい。一緒に島を盛り上げていきましょう。■

熊野礼美（くまの れいみ）
兵庫県出身。2014年に地域おこし協力隊として移住。佐渡UIターンサポートセンター、雑貨セレクトショップ「しまカタリ。」、シェアスペース「ひょうご屋」を運営する合同会社palette代表。趣味は登山。